史　跡

宮畑遺跡

MIYAHATA SITE

～最近の調査成果から～

MIYAHATA

史跡
宮畑遺跡

宮畑縄文むら

宮畑遺跡では、３時期の縄文むらが営まれていました。約4,500～4,000年前の縄文時代中期のむら、約4,000～3,000年前の縄文時代後期のむら、約3,000～2,500年前の縄文時代晩期のむら。宮畑遺跡は、全国的にも大変貴重な縄文むらであることから、平成15年８月27日に文部科学省より史跡に指定されました。

平成16年度からは、宮畑遺跡のむらの様子をさらに詳しく調べるための発掘調査を実施しました。約4,000～3,800年前頃の埋め立て工事の様子、宮畑縄文むらに暮らした人々の食べ物、遠いむらと交流などの様子などが新たに明らかになりました。

このパンフレットは、平成16年度からの発掘調査で新たにわかったことを中心に、宮畑遺跡について紹介します。

▲焼けた家（中期のむら）
屋根にあった土が焼けてレンガのようになってたまっています。家を送るためにわざと焼いたのです。

▲敷石住居（後期のむら）
石が650個以上平らな面を上にして敷かれています。関東地方のむらの文化が伝わって宮畑遺跡でも作られました。

▲宮畑遺跡の位置
福島駅から約６km北東の岡島地区に宮畑遺跡があります。近くには月輪小学校があり、福島工業団地の入口に位置しています。

▲空から見た宮畑遺跡
宮畑遺跡は東側に阿武隈高地をのぞむ、阿武隈川に面した段丘の縁に位置します。縄文時代には遺跡のある段丘のすぐ下を阿武隈川が流れていた時期もあったようです。

MIYAHATA

史跡
宮畑遺跡

中期と後期のむら

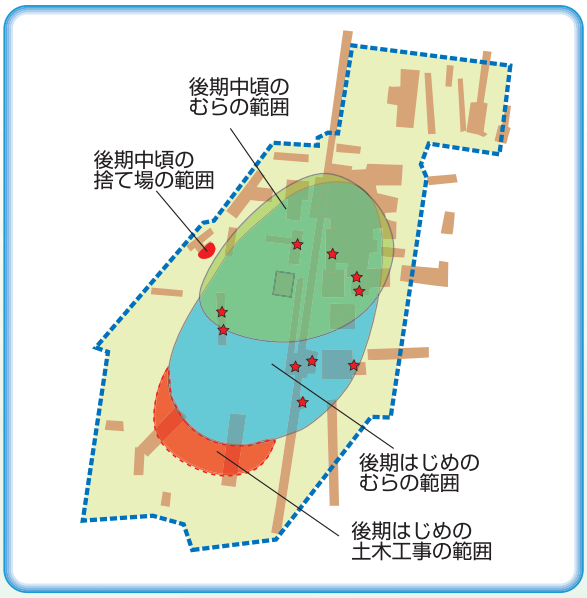
宮畑遺跡では縄文時代中期のなかばすぎ（今から約4,500年前）から晩期のなかば（今から約2,500年前）までの2,000年間、河岸段丘（かがんだんきゅう）の縁（ふち）の部分で、土地が丘のようにやや高くなったところを中心にむらが営まれていたと考えられています。

最初に作られたむらはもっとも広く、高い部分すべてを使って暮らしていたようですが、次第にむらの面積は小さくなり、中心が少しずつ北のほうに移っていきます。

▲中期の竪穴住居
柱と柱の間が帯状に赤く焼けています。焼く際に燃料を置いたと考えられています。

▲後期の竪穴住居
縄文時代後期の住居跡は、家の中央に石で囲ったいろりがあるだけの単純なつくりです。

▲中期のむら
青い部分が竪穴住居跡のある範囲で、西側のほうには住居のない広場があり、そこを囲むようにむらが作られています。



▲後期のむら
後期のはじめには集落の南側の低地が埋められ、後期の中頃には西側の斜面に捨て場が作られます。また、関東地方の影響を受けた平らな石を敷きつめる敷石住居（しきいしじゅうきょ）（星印）が作られるのもこの頃です。

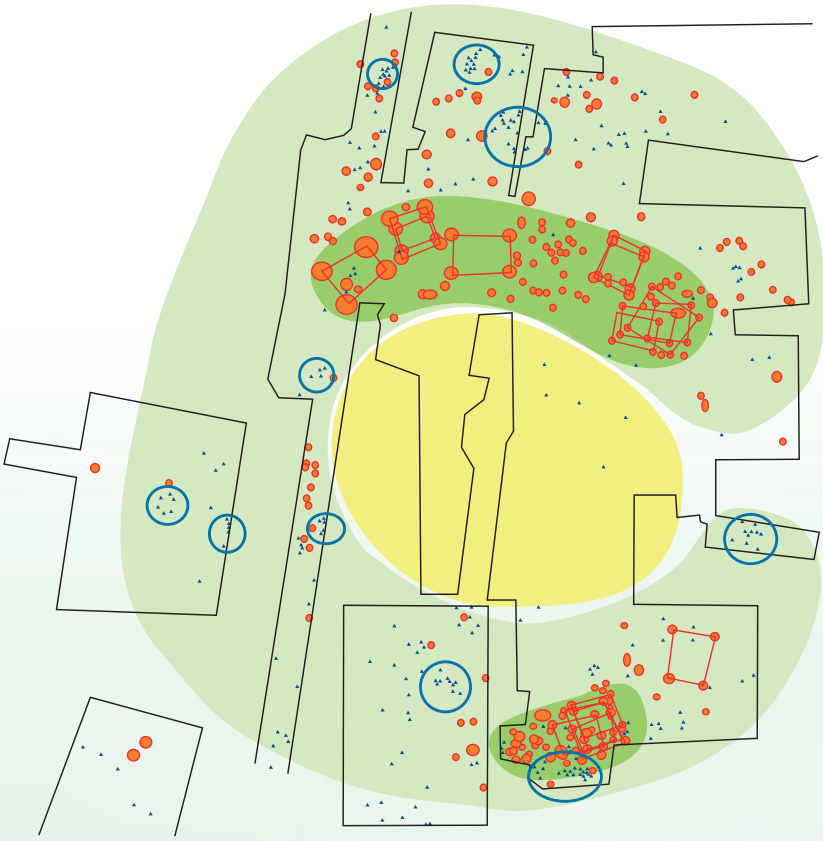
MIYAHATA

史跡
宮畑遺跡

宮畑縄文むらのシンボル

縄文時代晩期になると、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が作られるようになり、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）がほとんどなくなってしまいます。掘立柱建物は住居である可能性もありますが、子どものお墓である埋甕（うめがめ）とともに円形の広場を囲んで作られていることから、お墓に関係した施設であると考えられます。

また、掘立柱建物や埋甕（うめがめ）は広場の南北に多く、逆に広場の中や広場からはなれた場所には作られていないことがわかりました。とくに広場の北西に立てられた柱は太さが直径90㎝もあり、このむらのシンボルとなるようなものだったと考えられます。この柱は根元が地下２ｍの深さまで埋められていたことから、高さはその２倍の４ｍほどであった可能性も考えられ、遠くからでも宮畑遺跡の場所がよくわかる目印だったかもしれません。



▲晩期のむらのひろがり
広場（黄色い部分）を囲んで柱穴（赤い丸）と掘立柱建物（赤い丸を線でつないだもの）、埋甕（青い三角）が作られています。薄緑色の部分が掘立柱建物の作られた範囲で、濃い緑色の部分にとくに集中しています。また、埋甕もいくつかまとまっているところ（青い丸）が見られます

▲宮畑遺跡最大の掘立柱建物
直径２ｍ深さ２ｍの穴を掘ってその中に直径90㎝の柱を立てています

▲埋甕（子どもの墓）
地面に穴を掘り、深鉢（ふかばち）といわれる土器に死んだ子どもを入れて埋めました。

MIYAHATA

史跡
宮畑遺跡

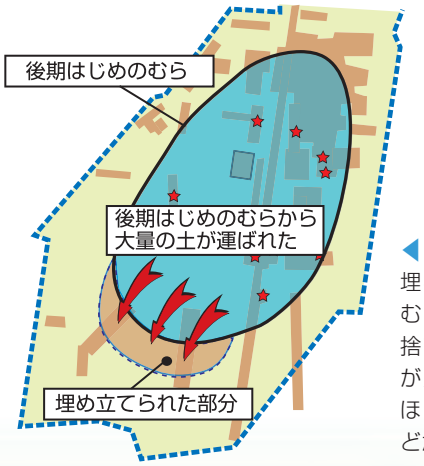
宮畑縄文むらの土木工事

縄文時代のむらの南は低くなっていて、湿地帯（しっちたい）が広がっていたことがわかっています。この湿地は最初はまったく利用されていませんでしたが、やがて人の手によって東西70m、南北20mほどの広い範囲で埋め立てられていることがわかりました。

埋め立てに使われた土に混ざっている、たくさんの土器や草木の花粉を調べたところ、埋め立てされたのは縄文時代後期のはじめ頃（今から約4,000年前）で、葦（あし）のはえた湿地が埋め立てによって次第に乾燥した草地に変わったことがわかりました。また、湿地の周辺には食料となるクリやクルミがはえていたこともわかりました。

ただ、乾燥した土地になってからも人が家を建てて住んだ跡はなく、何のために埋め立てをしたのかはよくわかっていません。

▲湿地の地層
黄色の地層が洪水の跡で、その下の黒い土が縄文時代の埋め立ての跡です。



◀運ばれた土
埋め立てに使われた土はむらのほうから運ばれ、捨てられた土器のかけらがたくさん含まれていたほか炭やクルミのからなどが混ざっていました。

◀発掘調査の様子
縄文時代後期はじめ頃の地面は湿地のあたりでは現在の地面よりも２m近く低くなっています。縄文時代に60cmほどの厚さで埋め立てが行われたあと、洪水によって埋まってしまい現在の地面の高さになったようです。

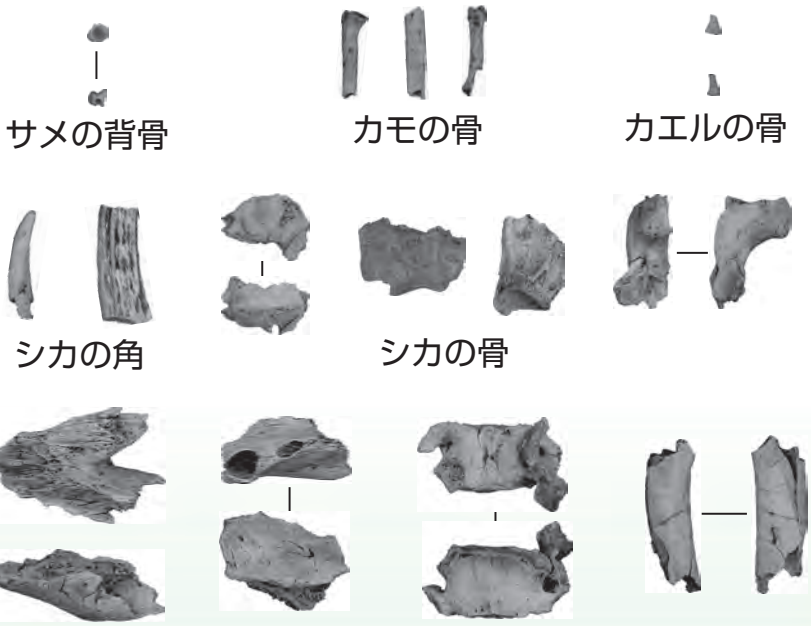
MIYAHATA
史跡
宮畑遺跡

宮畑縄文人が食べたもの

宮畑遺跡で暮らしていた縄文時代の人たちは、木の実を拾ったり、狩りをしたりして暮らしていたと考えられます。

たとえば、遺跡からみつかっているたくさんの矢じりは、縄文人たちが弓矢を使って動物をつかまえていたことを教えてくれます。また、粘土を丸めて焼いた錘（おもり）がみつかっていることから、川で網（あみ）を使って魚をとっていたこともわかります。

そのほか、近年の調査で最も多くみつかっているのは、縄文人の食べ残したイノシシやシカの骨ですが、そのほかにもカモやカエルの骨がみつかり、具体的にどんな動物をつかまえたのかが明らかになっています。また、サメの背骨がみつかったことから、海の魚も運ばれてきたようです。



▲狩りの様子
狩りは男の仕事で、タヌキ、ウサギなどの小動物からクマ・シカ・イノシシなどの大型動物まで、弓矢や槍（やり）、落とし穴などでつかまえました。

▲おもりと矢じり
奥のほうは魚とりに使われるもので、粘土を丸めて紐（ひも）をかける溝や穴をつけた、10～20ｇほどの網（あみ）のおもりです。手前は石を打ち欠いて作った矢じりで、けものをつかまえるときに使います。

MIYAHATA

史跡
宮畑遺跡

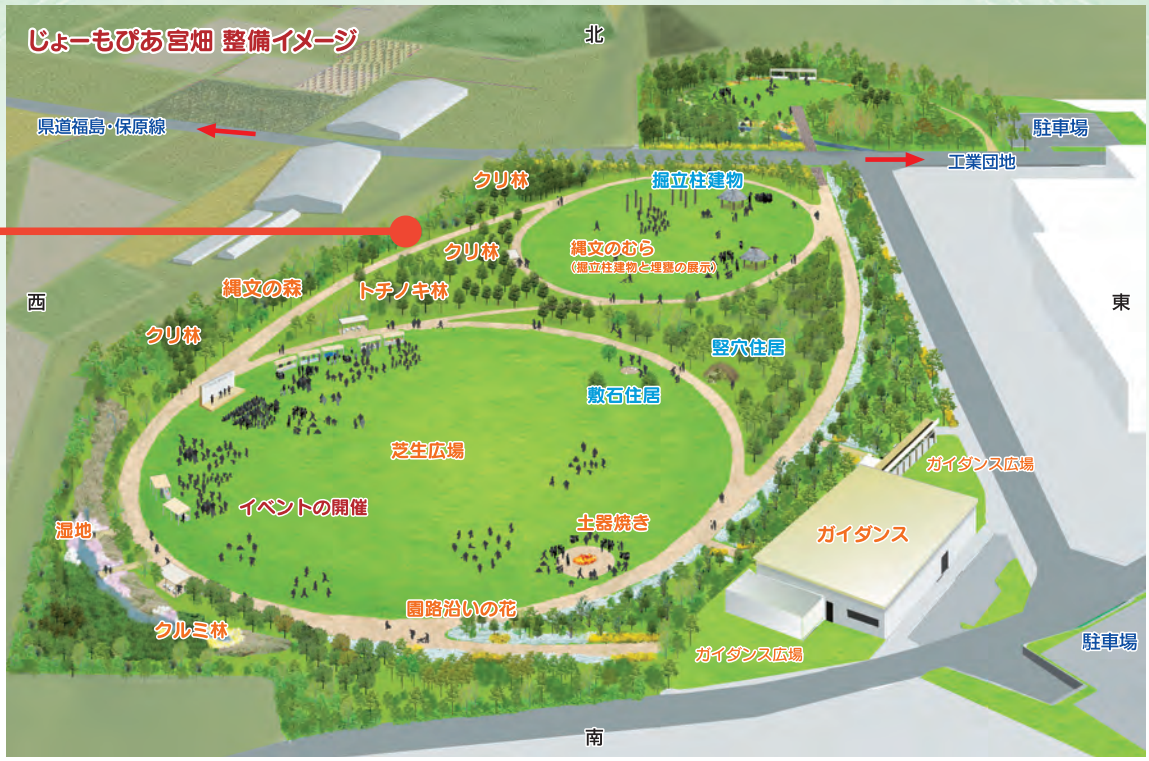
遠いむらとの交流

宮畑遺跡からは、アスファルトやヒスイ、黒曜石など、福島市内にはもともと存在しないものがみつかっています。そのほか、長くて丈夫であるため、道具の材料として加工されたクジラの骨が持ち込まれたり、おまもりに使われたと考えられるサメの歯などがみつかっています。遠く離れた地域から、生活に必要なものがもたらされており、文流や交易があったことがわかります。

■宮畑遺跡に運ばれてきたもの
アスファルトは秋田県の日本海沿岸から運ばれてきたと考えられます。小さな器に入れて焚き火などで温めて溶かし、接着剤として使われていたようです。ヒスイは新潟県から運ばれ、装飾品として使われました。黒曜石は石器の材料として使われたもので、伊豆・箱根などから持ち込まれたようです。

◀宮畑遺跡の矢じり
左側の二つの矢じりは、矢の軸に固定するためにアスファルトを接着剤として使ったものです（矢印の黒い部分）。右側の矢じりは黒曜石でできています。

宮畑遺跡の整備



縄文のむらと縄文の森、そして広々とした広場。宮畑遺跡を紹介し、縄文体験ができるガイダンス。宮畑遺跡は、縄文時代の学習、縄文体験、自然観察のほか、家族でのピクニックなどが楽しめる「じょーもぴあ宮畑」として生まれ変わります。

縄文人は、生活のめぐみを与えてくれるように、使った道具やまつりの道具に祈りをこめて「もの送り」をしたと考えられます。

下の写真は、「もの送り」をしたと考えられる土器の捨て場の様子です。

じょーもぴあ宮畑では、土器が捨てられた様子を見学できるようにする予定です。

捨て場からみつかった土器

◀土器のみつかった様子

縄文時代後期のなかば頃に、台地の上から斜面に向って捨てられたたくさんの土器が、当時のままの姿でみつかっています。なかには朱で塗られた土器もあります。